

# Rāmānuja の救済理論

— prapatti 思想を中心として —

石 飛 貞 典

Śrīvaiṣṇava の信仰およびその信者が、時に prapatti-mārga (自己帰投の道), prapanna (自己帰投せる者) と呼ばれる<sup>(1)</sup>ことから知られるように、prapatti はこの派の救済理論の中心概念の一つと言いうる。

周知の如く、救済理論に関して Śrīvaiṣṇava 内部に二つの対立的な考え方が存在する。Teṅgalai 派は prapatti を救いに至る唯一の道とみなし、他の儀礼等の必要性を全く認めない<sup>(2)</sup>。さらに、この派では神の恩寵を極めて重視し、prapatti を救いに至る積極的な手段とせず、単に神の恩寵の妨げを除去するための消極的なものとみなす<sup>(3)</sup>。人間の救いは人間の側からの働きかけ・努力によって実現するのではなくて、神の恩寵を俟って初めて可能となる<sup>(4)</sup>。一方、Vaḍagalai 派によると解脱には人間の努力も必要である。解脱の手段 (moksōpāya) としては、万人に開かれた prapatti<sup>(5)</sup>と、再生族にのみ許されるバクティ<sup>(6)</sup>とが認められる。但し、prapatti はバクティの支分 (aṅga) であって<sup>(7)</sup>、独立の手段ではない。

両派の間には、何を prapatti 思想の典拠とするかについても見解の相違がある。Teṅgalai 派は *Bhagavadgītā* 18.66, いわゆる caramaśloka に対する Rāmānuja の注釈を典拠とする<sup>(8)</sup>。ところが、Vaḍagalai 派の方では Rāmānuja の *Gītābhāṣya* を *Śrībhāṣya* と共にバクティを説くものとし、*Gadyatraya* を prapatti 思想の典拠とする<sup>(9)</sup>。

このように、Rāmānuja 以後の Śrīvaiṣṇava においては共に Rāmānuja の著作に典拠を見出しつつも、全く別々の救済理論が説かれることとなる。これは、Rāmānuja がバクティと prapatti の相互関係や prapatti の性格づけ等を明確に示していなかった<sup>(10)</sup>ことに起因するように思われる。そこで、本稿では Rāmānuja による prapatti の用例、caramaśloka 解釈、*Gadyatraya* 特に *Śaraṇāgatigadya* における救済理論を検討し、Rāmānuja の prapatti 観を明らかにすると共に、Śrīvaiṣṇava の救済理論の発展における Rāmānuja の役割についても考察していきたい。

## I

Rāmānuja の著作中での prapatti という語の用例はあまり多くはない。主著 *Śrībhāṣya* では一度も使われず<sup>(11)</sup>、処女作とみなされる *Vedārthasaṃgraha* では bhagavat-prapatti の形で二回<sup>(12)</sup>、*Gītābhāṣya* でも bhagavat-prapatti が六回<sup>(13)</sup>、mat (=bhagavat)-prapatti が二回用いられている<sup>(14)</sup>程度である。*Gadyatraya* や *Nītyaḡrantha* には prapatti の用例はない。

*Gitābhāṣya* 第七章序文において、Rāmānuja は、*Gitā* 第七章の内容を概説する中で bhagavat-prapatti に触れている。それによると、

「この第七章では、まず、念想対象たる最高プルンヤの如実なる本質が、[ついで] 根本原質によるその隠蔽が、そしてその排除のために bhagavat-prapatti が、さらに念想者の種別と知者の優越性とが説かれる。」<sup>(15)</sup>

とある。周知の如く、Rāmānuja の *Gitābhāṣya* は Yāmuna の *Gitārthasaṃgraha* の影響を強く受けている<sup>(16)</sup> が、この部分も *Gitārthasaṃgraha* 11 と殆んど同内容である。そこで両者の用語法を比較してみると、*Gitārthasaṃgraha* では *Gitābhāṣya* の bhagavat-prapatti に対応する箇所、śaraṇāgati を用いている<sup>(17)</sup>。逆に *Gitārthasaṃgraha* 5 の prapanna が *Gitābhāṣya* では śaraṇāgata と言い換えられる例もあり<sup>(18)</sup>、pra-pad- と śaraṇā-gam- は同義的に用いられていると考えられる。

さて、*Gitā* 第七章において bhagavat-prapatti が具体的に説かれている箇所は7.14である。ここでは神に帰依する (śaraṇam pra-pad-) 者がマヤーを離れて神を念想する (upa-as-) とある<sup>(19)</sup>。Vedānta Deśika はこの部分に注釈して、

「念想 (upāsana) の支分 (aṅga) たる prapatti がここで説かれている……。」<sup>(20)</sup>

と説いている。さらに、*Gitābhāṣya* 7.15の導入部分には、

「念想をもたらす (upāsanaṅpādini) bhagavat-prapatti をどうしてすべての人々が行なわないのか、という点に関して曰く——。」<sup>(21)</sup>

とある。従って、bhagavat-prapatti とは根本原質による神の本質の隠蔽を排除し、念想をもたらすもの、ということになる。

一方、*Vedārthasaṃgraha* §78では、*Gitā* 14.27を引いた後、グナと根本原質の結合からなる輪廻からの解脱 (saṃsāra-mocana) は bhagavat-prapatti なくしてはあり得ない、と説かれている<sup>(22)</sup>。この bhagavat-prapatti を bhagavat-pratipatti, bhagavat-prāpti とする写本もある<sup>(23)</sup>ことから、bhagavat-prapatti は「神の獲得」を意味するとの解釈もなされる<sup>(24)</sup>が、ここでは採らない。何故なら *Gitā* 14.27に対する Rāmānuja の注釈では、*Gitā* 7.14を引き、そこでグナの超克 (atyaya) とそれに基づく不滅なるもの・自在力・神の獲得 (bhagavat-prāpti) が bhagavat-prapatti を唯一の手段 (upāya) とすることが述べられている、として神の獲得の手段として bhagavat-prapatti を説いているからである<sup>(25)</sup>。ところで、Rāmānuja にとって「信愛の形態をとった (bhakti-rūpāpanna)」念想は最高者 (para) あるいはナーラーヤナ獲得の手段であり、解脱の達成手段 (mokṣa-sādhana) である<sup>(26)</sup>。又、*Gitābhāṣya* 7.19には、mat-prapadana が、「我 (=神) の従属物なること (śeṣatā) を唯一の心情 (rasa) とするアートマン<sup>(27)</sup>の如実な知」に基づくことが説かれている。以上を総合すると、ātman の知→prapatti→upāsana→bhagavat-prāpti という過程を想定することができる。さらに、*Gitābhāṣya* における pra-pad- が、(sam-)ā-sri- と言い換えることが報告されている<sup>(28)</sup>ことと考え合わせると、prapatti とは、神の従属物 (śeṣa) としての自己を認識した上で、神に依拠しようとすることであると言えよう。

## II

次に、*caramaśloka* に対する Rāmānuja の解釈について検討する。*Gitā* 18.66は、

「すべてのダルマを放棄して (*parityajya*) 我のみに帰依すべし (*śaraṇam vraja*)。我は汝を一切の罪 (*pāpa*) より解き放たん。」

と、一切のダルマの放棄、神への帰依、神による罪からの解放を説いている。この、いわゆる *caramaśloka* に対して Rāmānuja は、二通りの解釈を与えている。その第一は、

「カルマ・ヨーガ、ジュニャーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガを本質とし、至福の達成手段たるものであって、我への崇拜 (*mad-ārādhana*) として・極度の愛 (*atimātra-prīti*) に基づいて・資格に応じて・行われているところの、すべてのダルマを、前述の方法での果報 (*phala*)、行為 (*karman*)、行為主体性 (*kartṛtva*) 等の捨棄によって捨棄して我のみに行為主体 (*kartr*)・崇拜対象 (*ārādhya*)・獲得対象 (*prāpya*)・手段 (*upāya*) を求めるべし。……(中略)……我は汝をすべての罪から解き放たん——かくの如くにある汝を、我の獲得と矛盾し・無始なる時に積まれ・為すべきでないことを行うことと為すべきことを行わないことを本質とする・すべての罪から、解き放つてであろう。悲しむなかれ——悲嘆してはならない。」<sup>(29)</sup>

という解釈である。ここではアルジュナに対してバガヴァットがバクティ・ヨーガを含めた一切のダルマを捨棄すべきことを説いているが、これは人間の側からの救済への働きかけを不要と説くものではない。*Gitābhāṣya* 18.41に、果報と行為と行為主体の捨棄が次の如くに説明されている。すなわち、果報の捨棄とは行為によって生じる天界 (*svarga*) 等の果報を我が物 (*mama*) でないと思えることである。行為の捨棄とは、この行為は私の果報の達成手段であるから我が物である、という考え方を捨棄することである。又行為主体性の捨棄とは、一切主宰神 (*sarvēśvara*) に行為主体性を想定すること (*anusamdhāna*)<sup>(30)</sup> によって自己の行為主体性を捨棄することである<sup>(31)</sup>。*Gitābhāṣya* 18.10には、聖典で規定されている捨棄 (*śāstriya-tyāga*) とは行為における行為主体性と (行為への) 執着 (*saṅga*) と果報の捨棄であって、行為そのものの捨棄 (*karma-svarūpa-tyāga*) ではない、と説かれている<sup>(32)</sup>。従って、行為を行う際の自力の心、はからいを捨てるべきことを説くものであって、行為自体を不要としているわけではない<sup>(33)</sup>。次に、神に手段 (*upāya*) を求めよ、と説くことに関して一、二付言しておこう。*Śrībhāṣya* 3.2.34にも、最高プルジャが手段 (*upāya*) である、とする記事がある<sup>(34)</sup>。こうした考え方は、Yāmuna の *Gitārthasaṅgraha* 31にある「手段たること (*upāyata-*) を捨棄してそれを神にゆだねるべし (*nyasyed*)。」<sup>(35)</sup> という記述と軌を一にしている。Yāmuna の *prapatti* 思想が *Ahīrbudhnyasaṁhitā* の影響を受けており、彼の *Stotraratna* 22 および 48 も *Ahīrbudhnyasaṁhitā* 37.30cd-31 に言う『私は罪障の器であり、何の価値もない者、よるべなき者です。まさにあなたが私の手段 (*upāya*) となって下さい。』という帰依 (*śaraṇagati*) と呼ばれる祈りの気持ちを神に向けるべし。』<sup>(36)</sup> を反映していると考えられる<sup>(37)</sup> ことから、Rāmānuja もその影響を受けている可能性が高い。*Ahīrbudhnyasaṁhitā*

も Rāmānuja も、自己の頼りなさの自覚の上に立って、神に手段 (upāya) を求めている点では共通である。

次に、Rāmānuja の第二の解釈を見ておこう。彼は次のように言う。

「バクティ・ヨーガの開始に矛盾し、無始なる時より積まれた様々で無限の罪惡に対応し、それぞれの贖罪を本質とするところの、クリッチュラ……(中略)……アグニシュトーマ等の・様々で無限の・限られた時間に生存する汝には実践し難い・すべてのダルマを放棄して、バクティ・ヨーガの開始を成就するべく、最高の慈愛者 (paramakāruṇika) であり・差別を顧慮することなく一切世界の帰依所となる者 (anālocita-viśeṣāśeṣa-loka-śaraṇya) であり・依存せる者に対するいつくしみの大海 (āsrita-vātsalya-jala-dhi) である・我のみに帰依すべし。我は汝をすべての罪から——前述の本質を有するバクティの開始と矛盾するすべての罪から——解き放つであらう。悲しむなかれ。」<sup>(38)</sup>

これは、第一の解釈と異なり、「一切のダルマ」をバクティ・ヨーガの開始の妨げとなる罪惡に対する贖罪の儀礼であるとする。そしてそれらすべてを実行しようとする、いつまでもバクティ・ヨーガを開始し得ぬことから、それらを捨てよ、と説かれるのだとする。ここでは「一切のダルマ」が実行不要であり、帰依することによって神によりバクティを妨げる罪から解き放たれることになる。しかし、この第二の解釈が直ちに後代の prapatti 思想につながる、と考えることは早計である。ここではバクティに先行するダルマが不要とされており、バクティそのものの有効性・必要性が否定されているわけではない。むしろ贖罪儀礼による罪の浄化を計ること、つまり自力に頼ろうとすることがバクティに反するものとみなされていると言えよう。そういう点では、自力の心を捨てて実践すべしとする第一の解釈と根本的に異なる思想が説かれているわけではない。又、第二の解釈への導入部分<sup>(39)</sup>では、「バクティ・ヨーガは、すべての罪惡から解放された・バガヴァットへの極度の愛 (atyartha-bhagavat-priya) をもつ・人によって遂行さるべきものであるから」自分にはバクティ・ヨーガを始めることができぬと考えて悲しむアルジュナに対し、神が caramaśloka を説く、とされている。とすれば、この第二の解釈はバクティ・ヨーガが、神に帰依することによって誰にでも実行可能な易行であることを説くものとも考えられる。ともあれ、ここでは帰依 (śaraṇam vraj-) がバクティの前提として説かれている。同様に、*Vedārthasaṃgraha* § 91でも śaraṇāgati, ny-as- がバクティの前提条件として挙げられている<sup>(40)</sup>。その前提条件とは、①善を積み悪を減ぼすこと、②神の足への帰依 (śaraṇāgati) による神への専念 (abhimukhya)、③師の教えや聖典の知識による真理の理解に基づく平静 (śama)、克己 (dama) 等の心の美德を具えること、④カースト・生活期に適した宗教的実践 (karman) の遂行 (upasaṃhṛti) と禁ぜられた行為の捨棄 (niśiddha-parihāra)、⑤神の足へ自己および自己に関わるもの (ātmatmīya) を投げ出す (ny-as-) こと、⑥神への信愛 (bhakti) による賞讃 (stuti)・念想 (smṛti) 等を嘉する神の恩寵 (prasāda) によって内なる闇が破られること、の六つである。これらを満たした時、他を動機とせず不断で無上の愛によるきわめて明晰な直観たるに至った念想 (ananya-prayojanānavarataniratiśaya-priya-viśadatama-pratyakṣatāpannānudhyāna) を本質とするバクティによって、神の獲

得が可能となる。ここでは、しばしば prapatti の同義語として用いられる śaraṇāgati や ny-as-  
が、神獲得の手段でなくバクティによる神獲得の前提条件として示されている。

以上のことから、carmaśloka を解説するに当って、Rāmānuja が prapatti を、救済に向けての人間の側からの働きかけ・努力そのものを放棄することではなく、自力の心を捨てて行うべきことを説くものとみなしていること、バクティの妨げを除去するもの、バクティの前提条件としてとらえていることが知られた。従って、Rāmānuja の考え方としては、一応、prapatti→妨げ除去→バクティというプロセスを想定することができよう。しかし、*Gītābhāṣya*, *Śrībhāṣya*, *Vedārthasaṃgraha* の中では prapatti 思想そのものが直接的・積極的に主張されているとは言い難い。*Gītābhāṣya* における prapatti の用例を調査した Buitenen も *Gītābhāṣya* の中には後代の Śrīvaiṣṇava の如き prapatti 思想、つまり prapatti を神獲得に対するバクティとは別の、より好ましい方法とみなすような思想は存在しない、と結論づけている<sup>(41)</sup>。

### III

*Gadyatrāya* は *Śaraṇāgatigadya*, *Śrīraṅgagadya*, *Śrīvaikuṅṭhagadya* の総称であり、伝統的には比較的早い時期から Rāmānuja の真作として認められてきた<sup>(42)</sup>。教義的には大きな相違を見せる Teṅgalai 派と Vaḍagalai 派もその真作性に関しては一致して承認している<sup>(43)</sup>。このうち、prapatti 思想の典拠として特に重視されるのは *Śaraṇāgatigadya* である<sup>(44)</sup>。その内容を概観すれば、まず Śrī に帰依した上で、bhagavat への帰依の成就を Śrī に祈り、Śrī がそれを約束する(1~4)。つづいて bhagavat の図像学的描写の後、bhagavat への帰依が表明され、bhagavat の恩寵を請い、罪の赦しを請う(5~11)。そして parabhakti, parajñāna, paramabhakti の実現とそれに基づく nitya-kaiṅkarya の祈願が為され、bhagavat がそれを約す(12~23)、といった内容になっている。この中で説かれる救いへの過程は次の如く示しうる。即ち、

dvaya (-mantra) → dayā → parabhakti, parajñāna, paramabhakti → bhagavad-anubhava → prīti → nitya-kaiṅkarya

となる。

ところで、*Śaraṇāgatigadya* を初めとする *Gadyatrāya* の真作性を疑問視する研究者も少なくない<sup>(45)</sup>。*Śaraṇāgatigadya* における救済論を取り上げる前にこの点について検討しておこう。

*Śaraṇāgatigadya* を偽作とみなす場合して挙げられる根拠は次の四点に集約しうる。

- (1) śaraṇāgati (prapatti) を解脱への独立の手段とすること
- (2) dvaya (-mantra) によるバクティの障害の除去を説くこと
- (3) Śrī (Lakṣmī) の仲介者 (puruṣakāra) としての位置づけが Rāmānuja の他の著作と異なっていること
- (4) parabhakti, parajñāna, paramabhakti 並びに nitya-kaiṅkarya 等の他の著作にない概念が重視されていること

(1)に関して言えば、Vedānta Deśika は *Gadyatrayabhāṣya* で、*Gadyatraya* を「苦悩せる者 (ārta) の嘆願」を説くものとし<sup>(46)</sup>、*Rahasyatrayasāra* 24では *Gadyatraya* を śaraṇāgati を説くものとしていると言われる<sup>(47)</sup>。しかし、*Śaraṇāgatigadya* の中には prapatti の用例は無く、動詞形の pra-pad- が śaraṇam pra-pad- 等の形で二回用いられているのみである。その他 śaraṇāgati, śaraṇāgata が各一回、aśaraṇya-śaraṇya, ananya-śaraṇya が各二回用いられているのが目立つ程度であり、prapatti 思想が積極的に救済手段として説かれているわけではない。先に示した救いへの過程の最初に挙げた dvaya(-mantra) は、*Śaraṇāgatigadya* 中には具体的な内容が示されていないが、“śrīman nārāyaṇa-carāṇau śaraṇam prapadye, śrīmate nārāyaṇāya namaḥ” を指すと言われる<sup>(48)</sup>。この中で śaraṇam pra- pad- が用いられているが dvaya は救いへの過程の出発点でしかないし、śaraṇāgati や prapatti といった術語の形でその過程に組込まれているわけでもない。このように、*Śaraṇāgatigadya* において prapatti が解脱への独立の手段として説かれているとは言い難い。

次に(2)について見てみると、dvaya(-mantra)は確かに本書に特有のものである。しかし、dvaya を唱えることにより parabhakti 等の妨げが滅ぼされて parabhakti 等を獲得しうるとする考え方は、prapatti によるバクティの妨げの除去を説く caramaśloka 解釈や、Śrīvaiṣṇava との関わりの大い *Ahīrbudhnyasamhitā* における nyāsa-mantra による罪の除去の考え方<sup>(49)</sup>に通じ、それ自体決して目新しいものではない。他の著作中に dvaya が全く見られないことも、*Śaraṇāgatigadya* が濃厚に持つ宗派的性格や、他の著作より後に書かれたという伝承があること<sup>(50)</sup>を考慮に入れば、これも大きな問題とはなり得ない。

(3)の Śrī の位置については、Carman も指摘しているように、*Śaraṇāgatigadya* においては必ずしも人間と神の仲介者として規定されているわけではなく、比較的稀ではあれ他の著作中にも Śrī への言及がある<sup>(51)</sup>から、*Śaraṇāgatigadya* における Śrī への言及が特に異例のものとは思われない。

最後に、(4)の用語の問題のうち、nitya-kainkarya は Rāmānuja の著作中では *Gadyatraya*, *Nitya-grantha* 等の真作性が疑われているものの中でのみ用いられているが、Yāmuna によってすでに解脱の境地を示す語として用いられている<sup>(52)</sup>ことを考えると、これも問題視するにはあたらないであろう。次に parabhakti 以下の三つの概念は、Rāmānuja, Yāmuna いずれにおいてもセツトの形で用いられる例は他にない。parabhakti (parā bhakti) は *Śvetāśvataropaniṣad*, *Gītā* 等で古くから用いられ<sup>(53)</sup>、Yāmuna, Rāmānuja 共に数回用いている<sup>(54)</sup>が、parajñāna, paramabhakti の用例は無い。しかし、*Vedārthasaṅgraha* § 92で二種のバクティが説かれる<sup>(55)</sup>し、以下に述べるように内容的には *Vedārthasaṅgraha* 等の中にトレース可能であるから、Rāmānuja の他の著作との間に明らかな矛盾があるとは言い難い。

以上の如く、*Śaraṇāgatigadya* の真作性を積極的に否定するような明確な根拠が見出せない以上、伝統説ののっとり Rāmānuja の真作と考えるのが妥当と思われる。

さて、*Śaraṇāgatigadya* における救いへの過程の中でまず問題となるのは、先に触れた parabhakti, parajñāna, paramabhakti である。*Yatīndramatadīpikā* には、「知識(vedana), 静慮(dhyāna),

念想 (upāsana) 等の言葉で説かるべきバクティは、parabhakti, parajñāna, paramabhakti の階梯 (krama) を有し、prapatti を支分とする。<sup>(56)</sup>と説かれ、バクティの階梯を為す下位概念として用いられている。又、Vedānta Deśika は *Gadyatraya* への注釈の中でそれぞれ、より高次の直観 (uttarōttara-sākṣātkāra) への欲求、より高次の直観、直観したものに対する断えざる直証の欲求 (nirantarānububhūṣā) と説明している<sup>(57)</sup>。こうした後代の解釈を離れた Rāmānuja 自身の用法については彼の著作に直接の説明がないため、様々に理解されている。例えば、Buitenen は、karman → jñāna → bhakti に対応させ<sup>(58)</sup>、Sampatkumaran は *Gītā* 11.54; 18.54-55 で説かれる bhakti の三つの段階に対応させる<sup>(59)</sup>。又、Lester は、*Vedārthasaṅgraha* § 141, 144 や *Gītābhāṣya* 12.11 から推定されたもの (但し不当な拡大解釈とするが) として、それぞれ、根本原質と区別されたアートマンの直観によって生じひきつづき神の明晰な知覚を生じるもの、明晰な知覚、信愛という三つのものに対応させる説を、又、或る Śrīvaiṣṇava の説として *Gītābhāṣya* 18.55 の「信愛」、「我 (= 神) を知る」、「我に入る」に対応させるもの、および前述の Buitenen 説を紹介している<sup>(60)</sup>。

ここでは、*Śaraṇāgatigadya* 12~15 を手掛りとして parabhakti 以下の意味を検討しよう。まず、その内容を概観しておく。12 では、奴隷たる者 (dāsa-bhūta) であり「我は帰依せり (śaraṇāgato'smi), 御身の奴隷 (dāsa) なり。」と説く我をして、神的でグナから成るマーヤーを渡らしめよ、と説かれる。13 では *Gītā* 7.17~19 を引き、「この三偈に説かれた知者 (jñānin) と我を為せ。」と述べ、14 では *Gītā* 8.22; 11.54; 18.54 を引いて「以上の三箇所説かれた高次の信愛 (parabhakti) を具えたものと我を為せ。」と述べてその実現を神に祈っている。ついで 15 では「parabhakti, parajñāna, paramabhakti を唯一の本性とするものと我を為せ。」と祈願する<sup>(61)</sup>。

12 に言う「神的でグナからなるマーヤー」は *Gītā* 7.14 に基づく<sup>(62)</sup>。*Gītā* 7.14 では「何となれば、この神的にしてグナからなる我がマーヤーは超え難いからである。まさしく我に帰依する者 (mām eva ye prapadyante) がこのマーヤーを渡る (taranti)。」と説かれるが、Rāmānuja は pra-pad- を śaraṇam pra-pad-, 「マーヤーを渡る」を「マーヤーを超えて (utsrjya) 我を念想する (upāsate)」と注釈している<sup>(63)</sup>。従って、帰依 → マーヤーの超克 → upāsana の順序を想定しうるから、ここでは pra-pad- は upāsana の前提と考えられていることになる。それを受けた *Śaraṇāgatigadya* 12 は、まず「奴隷たる者であり……」と帰依を、「マーヤーを渡らしめよ」と神の upāsana を祈願しているわけであり、upāsana の前提としての帰依の考え方が示されていると言えよう。

13 に引かれる *Gītā* 7.17~19 は、7.16 で āṛta, jijñāsu, arthārthin, jñānin という四種の人々を善行ある人 (sukṛti) として説いた後、jñānin こそが神に愛される存在であり、四種の人々のうちで最も重要であることを説く部分である。Rāmānuja は *Gītābhāṣya* 7.16 で、jñānin を神の従属物たることを唯一の心情とするアートマンの本質を知る者 (bhagavac-cheṣataika-rasātma-svarūpa-vit) のことである<sup>(64)</sup>、とし、7.19 ではこの知によって mat-prapadana を生じるとしている。*Śaraṇāgatigadya* 13 の「知者」とはこのような、自己を知って神に帰依する存在を意味する。

つづく14で引かれる *Gītā* 8.22 は最高プルシャが他心無きバクティによって得られることを説き、11.54では「他心無きバクティによって正しく知り、見、入ることができる」と説いている。Rāmānuja は11.54に対する注釈で、他心無きバクティにより聖典に基づいて正しく知り正しく直観 (sākṣāt-kr-) し正しく入る (pra-viś-) ことができる、と説明を加えている<sup>(65)</sup>。さらに、14では *Gītā* 18.54 cd を引くが、そこでは「高次の (parā) 我 (=神) へのバクティ」が説かれる。Rāmānuja はこれを「我に対する……極度の愛の直証 (atyanta-priyānubhava) を本質とする高次のバクティ (parā bhakti)」と解する<sup>(66)</sup>。*Śaraṇāgatigadya* 14には引かれぬが、つづく *Gītā* 18.55 は高次のバクティによって神を知り、神を知って神に入ると説く。Rāmānuja はこれを「その (=18.54のバクティの) 結果」ととらえ、神の知の直後にバクティによって神に入る、とする<sup>(67)</sup>。ここでバクティ(a)→神の知→バクティ(b)→神の獲得というプロセス<sup>(68)</sup>が説かれるが、Rāmānuja はバクティ(b)を「(神の) 本質 (svarūpa)・本性 (svabhāva)・特質 (guṇa)・威光 (vibhūti) の経験 (darśana) の直後に存し、無限定で無上のもの」とし、さらに「神に入る」とは「神を獲得する (pra-āp-)」ことだとする<sup>(69)</sup>。次に述べる如く、Rāmānuja は upāsana と darśana を同義的に用いる。又、*Śaraṇāgatigadya* 12~13で示されるプロセスは、śeṣa としてのアトマンの知→śaraṇāgati (prapatti)→upāsana であり、parabhakti は神の知 (darśana) を生じるものであるから、14で言う「高次のバクティ」はバクティ(a)すなわち、śaraṇāgati (prapatti) に当ることになる。

従って、15で説かれる parabhakti, parajñāna, paramabhakti はそれぞれ、バクティ(a), 神の知, バクティ(b)に対応すると考えることができよう。つまり、paramabhakti は神獲得の直接の原因としてのバクティということになる。

ところで、Rāmānuja によれば、*Śvetāśvataropaniṣad* 3.8等の中で説かれる vid- は思念の連続 (smṛti-santāna), 経験 (darśana), 静慮 (dhyāna), 念想 (upāsana) と同義であり、これはバクティに他ならない<sup>(70)</sup>。バクティは特殊な知 (jñāna-viśeṣa)<sup>(71)</sup>であるが、単なる知 (vedana-mātra) ではない<sup>(72)</sup>。静慮、念想であり、特殊な喜悅 (prīti-viśeṣa) である<sup>(73)</sup>。又、バクティの形態をとった念想が最高者の獲得手段であり<sup>(74)</sup>、念想の中で喜悅が生じた時最高プルシャが獲得される<sup>(75)</sup>。この時念想は、「他を動機とせず不断で無上の愛によりきわめて明晰な直観たるに至った」と表現される<sup>(76)</sup>。以上を総合すると、神の念想 (経験, 静慮, 知, 思念) がバクティの形をとり、その中で神をきわめて明晰にまのあたりに体験して喜悅を生じるまでに至った時、神が獲得される、ということになる<sup>(77)</sup>。つまり、Rāmānuja の言う paramabhakti とはこのような状態にまで達したバクティを指すことになる。従って *Śaraṇāgatigadya* 12~15では、アトマンの知→parabhakti (=śaraṇāgati, prapatti)→parajñāna (=upāsana)→paramabhakti (→神の体験→prīti)→神獲得という神秘体験の深まりゆく過程が、主に *Gītā* を典拠として示されていることが知られる。これはⅢの初めに記した *Śaraṇāgatigadya* 16, 17, 20等で説かれる救いへの過程とほぼ同一越旨のものである。



#### IV

以上検討してきたことから知られるように、Rāmānuja の説く prapatti はバクティへと進むための出発点・前提として位置づけられ、様々な行為 (karman) を手段 (upāya) とみなすことを放棄すること、自力の心を捨てて神に帰依することを意味するものであった。prapatti という言葉は未だ術語として完全に定着するには至っておらず、śaraṇāgati, tyāga, nyāsa 等の用語も並行して用いられている<sup>(78)</sup>。また karman, yoga が完全に prapatti と分離されておらず、*Bhagavadgītā*→*Ahīrbudhnyasaṃhitā*→*Lakṣmītantra* と展開される prapatti 思想の流れ<sup>(79)</sup>に則してみると、*Ahīrbudhnyasaṃhitā* と *Lakṣmītantra* の中間に属すると言える。しかし、Rāmānuja は prapatti を救いへの手段として強調しているとは認めがたい。彼が救い・解脱の手段として重視するのは、あくまでもバクティであった<sup>(80)</sup>。これは彼の主著たる *Śrībhāṣya* や、*Gadyatraya* の一つで極めて宗派的色彩の濃い内容を持った *Śrīvaikunṭhagadya* の帰敬偈で、prapatti ではなくバクティ (もしくはバクティ・ヨーガ) が説かれている<sup>(81)</sup>ことから明らかである。

次に、彼が *Śaraṇāgatigadya* で説く救いへの過程について見ておくと、これは彼に先行する Yāmuna の考え方<sup>(82)</sup>ときわめてよく一致する。Yāmuna は karman→yoga→ātman の経験→parābhakti→神の認識→sukha→kiṅkaratva というプロセスを説いており、用語法に若干の相違があるものの基本的には大きな違いは見られない。ただ、Rāmānuja の場合、このプロセスの中に神の憐れみ (dayā)・恩寵 (prasāda) の考え方をはっきり組み込んでいるのが特徴と言える。これが、prapatti とバクティの相互関係の不明確さや prapatti の性格づけの不充分なども相まって、神の恩寵を強調して人為的手段の放棄を説く Teṅgalai 派とバクティを重視して解脱に向けた人間の側からの努力を求める Vaḍagalai 派の分裂を可能ならしめた一因と考えられる。

Rāmānuja は Āḷvār たちを中心に起ったバクティ運動を伝統思想の中に組込むことによって、理論化・体系化していこうとしている。バクティをウパニシャッドの章句に見られる vid-等と結びつけて解釈しようとする態度<sup>(83)</sup>にも彼のこうした意図がよく現われていると言えよう。

(1) J. Parthasarathi, "The Prapatti-Mārga", *Studies in Ramanuja* (Madras: Śrī Rāmānuja Vedānta Centre, 1980), p.85.

(2) N. Jagadeesan, *History of Sri Vaishnavism in the Tamil Country* (Madurai: Koodal Publishers, 1977), pp. 198-199.

(3) Robert C. Lester, "Rāmānuja and Śrī-Vaiṣṇavism; The Concept of Prapatti or Śaraṇāgati", *History of Religions* (University of Chicago) 5, Winter 1966, p.267.

(4) 徳永宗雄「Prapatti 思想の歴史的展開」(『宗教研究』211号, 1972年), 79ページ。

(5) "prapattiḥ sarvādhikārā" (*Yatīndramatāḍīpikā* by Śrīnivāsa, ed. by Swāmi Ādidevānanda, 2nd ed., Madras: Sri Ramakrishna Math, 1967, p.115, l.8).

(6) "bhaktāv adhikāras traivarṇikānāmeva/... na sūdrādhikārah/" (*Yatīndramatāḍīpikā*, p. 114, l.1-3).

(7) "...bhaktiḥ... prapatty-āngikā ca" (*Yatī-ndramatāḍīpikā*, p.97, l. 3-4).

- (8) Lester, p.267.
- (9) N.S. Anantarāṅgachār, *The Philosophy of Sādhanā in Viśiṣṭādvaita* (Prasarāṅga : University of Mysore, 1967), p.194.
- (10) Cf.M. ヘーダエトウツラ, 宮元啓一訳『中世インドの神秘思想, ヒンドゥー・ムスリム交流史』(刀水書房, 1981年) 139 ページ。又, Rāmānuja に大きな影響を与えた Yāmuna も, bhakti と prapatti の相互関係等についてははっきりした態度をとっていない。拙稿「Yāmuna における mokṣa と sādhanā」(『印仏研』32-1, 1983年) 507-506ページ参照。
- (11) 神館義朗「シュリー・パーシュヤに於けるカルマンの問題」(『文化』20-4, 1951年), 613ページ, 注(7), および S. R. Bhatt, *Studies in Rāmānuja Vedānta* (New Delhi: Heritage Publishers, 1975), p.152.
- (12) 松本照敬「Vedārthasamgraha における mokṣa と prapatti」(『印仏研』27-1, 1978年), 238ページ。
- (13) intr. 7. 1, intr. 7. 15, intr. 8. 1, 15.6に各一回, 14.27に二回用いられている。
- (14) 15.11に二回用いられている。その他, mat-prapadana の形が7.19にある。
- (15) *Sri Bhagavad Gita with Sri Bhagavad Ramanuja's Bhashya and Srimad Vedanta Desika's Commentary named Tatparya Chandrika*. ed. by Sri Abhinava Desika (Uttamur) J. Viraraghavacharya (Madras: Ubhaya Vedanta Granthamala) [以下U本と略記], p. 235.
- (16) J.A.B. van Buitenen, *Rāmānuja on the Bhagavadgītā*, 2nd ed. (Delhi: Motilal Banarsidass, 1968), pp. 9-12.
- (17) Buitenen (1968), p.177.
- (18) U本, p.29.
- (19) U本, p.247.
- (20) U本, p.247.
- (21) U本, p.247.
- (22) J.A.B. van Buitenen, *Rāmānuja's Vedārthasamgraha* (Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute, Deccan College Monograph Series 16, 1956), p.116. なお, *Vedārthasamgraha* のパラグラフ番号は本書に拠る。
- (23) Buitenen (1956), p.116, f.n.6; p.118, f.n.1.
- (24) Lester, p.276, f.n.32. cf. 松本照敬 (1978), 238ページ。
- (25) U本, p.475.
- (26) *Gītābhāṣya* intr. 7.1 (U本, pp. 232-233).
- (27) ここで言うアートマンは個我を指す。Rāmānuja はブラフマンとアートマン, 神と個人我の関係を śeṣa-śeṣi-bhāva としてとらえている。類似の考え方は *Ahīrbudhnyasamhitā* 52.7にも説かれている (cf. Dasgupta, *History of Indian Philosophy*. vol. III, repr., Cambridge: University Press, 1968, p.53.)。
- (28) Buitenen (1968), p.25.
- (29) U本, pp. 598-599.
- (30) これは Yāmuna の *Gītārthasamgraha* 22に言う “īsvare kartṛtā-buddhiḥ” (Buitenen [1968], p.178) の影響を受けていると思われる。
- (31) U本, p.542.
- (32) U本, p.547. *Gītābhāṣya* 2.4.7 (U本, p.81) でも phala を伴う karma により束縛が, phala を捨てて神の崇拜 (ārādhana) を本質とする純粋な (kevala) karma が解脱の原因となる, と説かれている。
- (33) これは Yāmuna も同様に説くところである。前掲拙稿507ページ参照。
- (34) “prāpyasya parama-puruṣasya sva-prāptau svasyaivôpāyatvôpapatteh” (*Brahmasūtra Sribhāṣya with Srutaprasaṅgika*, Vol.2, Madras: Ubhayavedantagrānthamālā, 1967, p.453).

- 35) Buitenen (1968), p.179.
- 36) *Ahīrbudhnyasamhitā of the Pāncarātrāgama*, Vol. II, 2nd ed. (Madras: The Adyar Library and Research Centre, The Adyar Library Series Vol. 4, 1966), p.357.
- 37) 前掲拙稿507ページ。
- 38) U本, pp.600-602.
- 39) U本 p.600.
- 40) Buitenen (1956), p.126.
- 41) Buitenen (1968), p.26.
- 42) *Divyasūricarita* VIII, 10 (*Divyasūri Caritam by Garuḍa Vāhana Paṇḍita*, Ed. by T.A. Sampath Kumaracharya, K.K.A. Venkatachari, Bombay: Anantacharya Research Institute, no date, p.387), *Yatirājavaibhavam* 73-74 (松本照敬「ラーマヌジャの生涯——Yatirājavaibhavam 和訳——」, 『成田山仏教研究所紀要』第7号, 昭和57年, 49ページ)。
- 43) N.S. Anantarangachar, *The Philosophy of Sādhana in Viśiṣṭādvaita* (Prasaranga: University of Mysore, 1967), p.193. 又, John Braisted Carman, *The Theology of Rāmānuja, An Essay in Interreligious Understanding* (New Haven and London: Yale University Press, 1974), p.63.
- 44) Carman, p.62.
- 45) Lester (p.267), Agnihothram (Carman, pp.212-214, pp.298-300による) 等。
- 46) *Srimad Vetanta Desika's Chatusslokibhashyam, Sithohraratnabhashyam and Gadyatrayabhashyam*. Ed. by Chettaloor V. Srivatsankacharyar (Madras: Sri Vedanta Desika Seventh Centenary Trust, no date), p.137.
- 47) Anantarangachar, p.194.
- 48) Anantarangachar, p.203, f.n.29, M. Narasimhachari, *Contribution of Yāmuna to Viśiṣṭādvaita* (Madras: Prof. M. Rangacharya Memorial Trust, 1971), p.62, f.n. 299.
- 49) *Ahīrbudhnyasamhitā* 37.33.
- 50) *Yatirājavaibhava* 73では、一連の注釈を著わし、その後 (tataḥ) *Gadyatraya* を著わした、とされる (松本照敬「ラーマヌジャの生涯」, 49ページ)。但し、*Gadyatraya* が最初に著わされた、とされることもある (Dasgupta, *A History of Indian Philosophy*, vol. III, Cambridge: University Press, 1968, [repr.] p. 102)。
- 51) Carman, p.238f.
- 52) 前掲拙稿, 506ページ。
- 53) 例えば *Śvet. Up.* 6.23, *Gītā* 18.54; 68など。
- 54) 例えば *Gītārthasamgraha* 26, *Vedārthasamgraha* § 92, 141, 144等, *Gītābhāṣya* 12.12, 18.54等。
- 55) Buitenen (1956), p.128.
- 56) *Yatīndramatādīpikā*, p.97
- 57) *Gadyatrayabhāṣya*, p.136.
- 58) Buitenen (1956), p.32.
- 59) M.R. Sampatkumaran (tr.), *The Gitābhāṣya of Ramanuja* (Madras: Prof. M. Rangacharya Memorial Trust, 1969), p. xxii.
- 60) Lester, p.280.
- 61) *Śrī Bhagavadrāmānujagrānthamālā* (Kāñcipuram: Granthamālā Office, 1956), p.175.
- 62) Lester, p.271.
- 63) U本, p. 247. *Gītābhāṣya* 14.27 で同様のことを説く (本稿24ページ参照)。
- 64) U本, p.249. 又, 注(27) 参照。
- 65) U本, pp. 389-390.

- 66) U本, pp.585-586.
- 67) U本, p. 587.
- 68) バクティによって知が生じ、知によってバクティが生じるという考え方は Madhva によっても説かれている。前田専学「マドヴァの多元論的実在論」(『インド思想史』東京大学出版会, 1982年, 第四章 1. a), 195ページ。又, 日野紹運「ヒンドゥーの宗教世界——ヴェーダーンタ学匠の教説をめぐって——」(『Sambhāṣā』5, 1983年), 77ページ。
- 69) U本, pp. 587-588.
- 70) U本, pp. 233-234.
- 71) *Vedārthasaṃgraha* §92 (Buitenen [1956], p.128), §144 (*ibid.*, p.174). そもそも, 神秘体験を知として把握するのがインドの神秘家の特徴である, といわれる(岸本英夫『宗教神秘主義, ヨーガの思想と心理』大明堂, 昭和48年, 第9版, 209ページ以下特に216-217ページ)。
- 72) *Vedārthasaṃgraha* §91 (*ibid.*, p.127).
- 73) *Vedārthasaṃgraha* §141 (*ibid.*, p. 170).
- 74) *Gītābhāṣya* intr. 7.1 (U本, p.233).
- 75) *Vedārthasaṃgraha* §92 (*ibid.*, p. 127).
- 76) *Vedārthasaṃgraha* §91 (*ibid.*, p.126).
- 77) 日野 (1983), 75ページ。
- 78) *Gadyatrāya* においては, śaraṇāgati が *Śaraṇāgatigadya* と *Nityagrantha* に 各1回, pra-pad- は *Śaraṇāgatigadya* に 各2回, ny-as- は *Nityagrantha* に数例(いわゆる mantra-nyāsa に相当する例は多数)みられる。また, *Gītābhāṣya* 18.1 序文では, tyāga=samnyāsa とされ, 共に mokṣa-sādhana と呼ばれている。
- 79) 徳永宗雄, 93-94ページ。
- 80) *Vedārthasaṃgraha*, *Śrībhāṣya*, *Gītābhāṣya* におけるバクティの概念については, 松本照敬「ラーマースジャにおけるバクティの概念」(『インド古典研究』第6巻, 1984年5月, 119-137ページ) 参照。
- 81) “...bhavatu mama... śeṃuṣī bhakti-rūpā” (*Śrībhāṣya*, Vol. 1, p.3), “...bhakti-yogākhyam ratnaṃ samdarśayāmy aham” (*Śrīvaikunṭhagadya* in *Śrī Bhagavadrāmānujagranthamālā*, Kāñcīpuram: Granthamālā Office, 1956, p.178).
- 82) Yāmuna の救済論については, 前掲拙稿505ページ参照。
- 83) 本稿 30ページ参照。